

Jane Loudonの旅

— *The Mummy!* からガーデニング・ブックへ

小 柳 康 子

1. はじめに

19世紀前半から半ば過ぎまでを生きたジェイン・ラウドン (Jane Loudon; 1807-58) は、造園理論家・実践家として膨大な著作を残したジョン・クロウディアス・ラウドン (John Claudius Loudon; 1783-1843) の妻、口述筆記者、看護師、旅の随行者であり、夫の死後1人娘を立派に育て上げた母であった。この意味でジェインは、まさにヴィクトリア時代の理想的女性と言えるだろう。しかし妻として母としての役割を見事に果たしただけでなく、古代エジプトのミイラを22世紀の世界に蘇らせる大胆な小説『ミイラ! 22世紀の物語』(*The Mummy! A Tale of the Twenty-Second Century*, 1827) を、さらには、女性のための20冊近いガーデニング・ブックを書き残したジェイン・ラウドンは、女性のライティングの歴史に忘れてはならない貢献をした。ジェインの著作は現在においてもそれほど多くの読者を持つとは言い難いが、SF小説やガーデニング・ブックという異なるジャンルの作品を出版した彼女の人生を概観することは、19世紀のイギリス社会を新しい角度から見直す契機になると思われる。本稿では『ミイラ!』を、19世紀イギリス社会におけるエジプトやミイラへの関心という背景のもとで考察した後、ジョン・ラウドンと結婚したジェインが、ガーデニングに関する著作を書くに至った経緯とそれらの持つ意義を考えてゆく。¹

2. 生い立ち―父と娘

ジェイン・ラウドンは1807年8月19日、バーミンガムに生まれた。² 父は裕福なビジネスマンだったと言われているが、具体的な職業は不明である。ナポレオン戦争がイギリスの勝利で終結し、バーミンガムには新しい工場や住宅が作られ、活気に満ちた摂政時代が始まろうとしていた。ジェインは学校には通わず、自宅でガヴァネスによる教育を受け、幼い時から父の書斎に自由に出入りして様々な本を読むという少女だった。12才になった1819年に母が亡くなり、父は心の傷をいやすため、ジェインを連れて1年間大陸への旅に出かけた。この旅行で父と娘がどの国々を巡ったのかは明らかではないが、観光に明け暮れたのではなく、家庭教師について外国語を学んだと言われている。レベルがどの程度であったのかはともかくとして、かなりの数の外国語を知っていた。帰国後、バーミンガムの中心街から郊外に転居し、カントリーライフが始まった。植物を育てたり、庭を美しく整えたりすることへの興味はまだなかったが、家事を切り盛りし、父の相手をする生活は、24才年上の夫ジョン・ラウドンに尽くす後年のジェインの生き方に繋がっていったと思われる。

父は1824年に亡くなり、1人娘にも関わらず遺産は少なかったため、ジェインは17才にして自立し経済力をつけなければならなくなる。しかし彼女は当時の中流階級の女性の職業と考えられていたガヴァネスではなく、物書きの道を選択し、父の亡くなった年に『散文と韻文』(*Prose and Verse*, 1824)という薄いアンソロジーを出版した。前半が5つの短編、後半が17の長短とりまぜた詩からなるこの作品は、ジェイン自身の詩と、フランス語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語で書かれた小品の英訳から成り立っており、彼女の語学力と文才を窺い知ることができる。『散文と韻文』の出版所は自宅の所在地となっている完全な私家版であった。この出版に関してアドバイスを授けた大人はいたと思われるが、父の死後すぐに自作の出版を実現させたところにも、並大抵ではない意志の強さが見て取れる。序文では慣例に従ってこの小品への謙遜が述べられているが、次回作への意欲

にも言及している。(1)

この序で述べられている旅行記が出版されなかったことから分かる通り、アンソロジーの売れ行きは微々たるものであった。ジェインはこの経験から、経済力をつけるためには、読者の求める売れ行きのよい本を出版することが重要だということを学んだに違いない。これを裏付けるように、『ミイラ!』の序文でジェインは、読者の興味と関心を惹き、売れ行きを伸ばすための物語は何がいいか、また、ありふれた平凡な題材ではなく、誰にも思いつかない世界と主人公を持つ小説はどのようなものかを必死で考えたと述べている。6月の夕暮れ時、散歩に出かけて、自然の美しさに誘われて眠り込んでしまったジェインの夢に、「未来の年代記」(the Chronicle of a future age) である「巻物」(a scroll) を持つ「妖精」(a spirit) が現れ、その中に記されていることを題材にするように促す。ここには、中世作品に類出する夢物語の枠組みを借りて、今まで誰も書いたことのないテーマと主人公を持つ小説を書こうという若いジェインの野心が現れていると言える。

3. 『ミイラ!』誕生の背景

—「エジプト熱」(Egyptomania) と「ミイラ熱」(mummymania)

『ミイラ!』という小説をジェインが構想した理由を理解するには、18世紀後半から19世紀初頭にかけてのイギリス社会において、エジプト熱やミイラ熱と言われるブームが起こっていたことを知る必要がある。『ミイラ!』創作に影響を与えたと言われることの多いメアリ・シェリー (Mary Shelley; 1797-1851) の『フランケンシュタイン』(*Frankenstein*, 1818) をメアリがどこから発想したのか議論する際に、18世紀末から19世紀初めの科学や医学の状況を抜きにしては語ることができないのと同じく、『ミイラ!』を考察する際にも、これらの現象をまず概観することが必要だからである。

古代エジプトについてのヨーロッパの人々の関心は、ギリシア・ローマ時代から途絶えることのない底流として流れ続けてきていたが、これがと

りわけ大きくなったのは1798年から3年間にわたるナポレオンのエジプト遠征—ナポレオン自身は1799年に部下の軍隊を残してフランスに帰国したが—の結果であった。³ この遠征からは古代エジプトの様々な遺物がもたらされ、フランスやイギリスでは、建築、美術、室内装飾、服装など広範囲な分野において古代エジプトへの関心が大きくなっていった。とりわけ、エジプト熱と言われるこの熱狂の嚆矢となったのは、フランスの敗北によってイギリスにもたらされた「ロゼッタ・ストーン」(Rosetta Stone)である。1799年、エジプトの港湾都市ロゼッタでフランスの軍人により発見され、いまだ読み解くことのできなかったヒエログリフ解読への可能性をもたらし、ロゼッタ・ストーンは、帰属をめぐる英仏両国の錯綜した論争の果てに、1801年イギリスに運ばれ、翌1802年から大英博物館に展示された。ジェインは父の死後、バーミンガムからロンドンに出て、画家ジョン・マーティン (John Martin; 1789-1854) の家に滞在していたので、大英博物館で公開されていたロゼッタ・ストーンを見たことがあったかも知れない。見たことはなくても、大々的に報道されたロゼッタ・ストーンについて知っていたことは確かだと思われる。

ロゼッタ・ストーンがエジプト熱の中心的役割を果たしたとすれば、それより少し後の1818年に、イタリア人のジョヴァンニ・バティスタ・ベルツォーニ (Giovanni Battista Belzoni; 1778-1823) によってイギリスに運ばれ、ロゼッタ・ストーンと同じく大英博物館に展示されたラムセス2世 (Ramses II) の頭部もまた、エジプト熱の一端を担ったということができる。⁴ 1778年にイタリアのパドヴァに貧しい床屋の息子として生まれたベルツォーニは、貧困とナポレオンによるイタリア占領から逃れるために、フランス・オランダへと出国し、その後イギリスにやってきた。ベルツォーニはローマで身につけた水力学の知識をイギリスで生かす仕事につくことはできず、並はずれて大きく強靱な肉体を武器に、見世物、今でいうショービジネスの世界に身を投じた。彼はサドラーズ・ウェルズを始めとして、幾つかの劇場で芸人として働いたが、この仕事が自分の果たすべき天職ではないと感じて、妻サラ (Sarah; 1783-1870) と共に1815年にエジプトへ渡る。ナ

イル川の水を利用した灌漑施設を作りたいという時の権力者ムハンマド・アリー・パシャ (Mohammed Ali Pasha; 1769-1849) の要望を叶えて、大衆劇場のショーマンではない技術者としての自分を証明したいという野心があったからだと思われる。現地で組み立てた機械は期待外れの代物で、ムハンマドが望んだ成果をあげることはできなかったが、この不成功が逆に、別の新たな仕事を彼に与える契機となった。ベルツォーニは、エジプトのイギリス総領事ヘンリー・ソールト (Henry Salt; 1780-1827) の知遇を得、各地を探検して、いまだ知られざる古代遺跡を発見し、そこで見出した遺物やミイラをイギリスに持ち帰るという仕事に従事することになったのである。

ベルツォーニは1815年から8年ほどに及ぶエジプト滞在の間、ソールト、スイス人ジョン・ルイス・ブルクハルト (John Lewis Burckhardt; 1784-1817)、フランス総領事ベルナルディーノ・ドロヴェッティ (Bernardino Drovetti; 1776-1852) などヨーロッパの政治家、学者、探検家たちと知り合っており、ある時は協力し合い、またある時は競争しつつ、ナイル川流域の奥地、さらには東隣りのヌビアまでも足を延ばして、古代の神殿、墳墓、ミイラを数多く発見した。ベルツォーニの名がイギリスにおいて知られるようになったのは、7トン以上もある「若きメムノン」(Young Memnon) という別名を持つラムセス2世の頭部を難儀の末に砂から引き上げ、船に乗せてイギリスまで運んだという作業によってであるが、彼は他にも、アブ・シンベル神殿 (Abu Simbel Temples) の砂を掻き出して埋もれていた巨大遺跡を地上に蘇らせ、またラムセス2世の父セティ 1世 (Seti I; 在位1294BC-79BC) の「白い花崗岩で作られた美しい棺」(alabaster sarcophagus) を発見した男でもあった。

ラムセス2世の頭部は、テーベの葬祭殿「ラムセウム」(Ramesseum) の入り口に置かれていた二対の像の一つで、フランス軍が発見したものの、あまりの重さに運び出すのを断念したものであった。1818年にイギリスに到着したこの像の所有を巡って悶着はあったが、3年後の1821年に大英博物館が購入して展示し、エジプト熱はさらに高まった。この像の発見がパー

シー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley; 1792-1822) のソネット「オジマンディアス」(“Ozymandias”, 1818) を生むきっかけを作ったのは有名なエピソードである。シェリーのソネットは、1817年に書かれ1818年の1月に『エグザミナー』(*The Examiner*) 誌に発表されていることから、詩人は実物を見る前に、この像の運び出しとイギリスに向けての出国のニュースに創作意欲を刺激されて詩作したことがわかる。

ロゼッタ・ストーンやラムセス2世の頭部への熱狂に勝るとも劣らない人気を博したのがミイラであった。当時の人々がミイラという存在に、自分たちとは異なる古代エジプト人の死生観を見ただけでなく、その作成方法や布に包まれた下に数千年の長い年月を経た肉体がどのような形で保たれているのかに興味を抱いたからだ。ヨーロッパではヘロドトスの『歴史』第2巻エジプトの項を通して、エジプト人が死後の人間をミイラにするという事実は知られていたが、実際にミイラがリアルな存在として姿を現したのは19世紀初頭以降のことである。ナポレオンがミイラの頭部をフランスに持ち帰って以来、遺跡の一部やピラミッド内部の埋葬物だけでなく、ミイラを発掘して持ち帰るという行為が増えてきたのである。ベルツォーニはミイラの共同墓地に足を踏み入れる経験もして、またミイラをイギリスに持ち帰ってもいる。このミイラ熱の極致は、ミイラを飾り物として居間に置いてお茶を楽しみ、自宅や公共的なスペースで「ミイラの解包」(mummy unwrappings) という、ミイラを覆う布を取り払っていく作業を見世物にする行為の流行であった。⁵

遺跡発掘の一段落の合間に、エジプトからロンドンに一時戻ったベルツォーニは、自らの体験を『エジプトとヌビアにおける(水力)工事と最新の発見物語』(*Narrative of the Operations and Recent Discoveries in Egypt and Nubia*, 1822) としてジョン・マレー社から出版した。エジプト熱のさなかにあったイギリスでこの書は初版の1000部が売り切れた後、続けて2版、3版が出版されるほどの人気を博した。子供向けの道徳的な本を多く書いたルーシー・サラ・アトキンズ・ウィルソン (Lucy Sarah Atkins Wilson; 1801-63) は抜け目なくこの体験記を、母が4人の子供たちに語って聞かせる会

話形式の道徳的読み物『冒険の果実』(*The Fruits of Enterprize: Exhibited in the Travels of Belzoni in Egypt and Nubia: Interspersed with the Observations of a Mother to Her Children*, 1821) に作り直して発表してもいる。⁶

ラムセス2世の頭部をもたらし、異国での冒険記を書き上げて一躍有名人となったベルツォーニはさらに1821年、ウィリアム・ブロック (William Bullock; 1773-1849) がロンドンに開いていた珍奇な収集物展示館「エジプト・ホール」(Egyptian Hall) を借り上げ、エジプト展を催した。ここには30分の1に縮小されたアブ・シンベル神殿やセティ1世の墓のレプリカ、本物の出土品やミイラ2体などが展示されて、多くの見物客が見学に訪れた。19世紀初めのエジプト熱、ミイラ熱は、遠い過去や異質なもののへの憧憬が現実世界の旅行や探検の産物として具現化する時代の幕開けを告げるものであったと言えるだろう。

ジェインがベルツォーニの体験記やアトキンズの物語を読んだ事実は確かめることはできないが、彼女はイギリス社会がエジプト熱に染まり、ミイラが日常的な話題に上る状況を前にして、ミイラをテーマにした小説を書くことが注目を集め、経済的にも潤うことを理解していたのは確かだと思われる。社会の要求に寄り添い、人々が求めていることを興味を惹く形で書き、金銭的にも保障される作品を生み出すことは、後年、自分の書くもののジャンルを小説からガーデニング・ブックに変えてもジェインが貫き通した姿勢である。経済的に恵まれた女性たちが売れ行きを心配せずにものを書くのとは異なり、ジェイン・ラウドンはそのキャリアの出発点からプロ意識に徹した女性だったのである。

4. 『ミイラ!』—過去・現在・未来

『ミイラ!』は、2127年のイギリス、エジプト、スペインを舞台に、王位をめぐる争い、若い男女の恋愛、親子の葛藤、カトリック神父の陰謀などの様々な出来事が起こる壮大な作品である。そのため散漫で冗長な箇所も多く、読み通すのにいささか忍耐力を要することは否めない。しかし22世

紀のイギリスに、3000年の眠りから蘇ったミイラが現れ、王位をめぐる争いの当事者たちに働きかけて人間に教訓を教え、最後は使命を終えて元の棺の中に戻るという、それまで誰も考え付かなかった枠組みにオーバーラップして、未来社会における文明の利器や生活様式が描かれているため、読者の興味は大いにかきたてられたと思われる。⁷

2127年のイングランドは政体、宗教の変遷を経て、女王クロードシア (Claudia) の統治の下で「絶対君主制」(absolute monarchy) を敷くカトリックを国教とする社会となっている。しかし一見平和に見える社会の水面下では、アイルランド、ギリシア、ドイツとの不和や国王の跡継ぎを巡る争いが進行しており、小説の展開は予断を許さない。主人公は有力一族であるモンタギュ家 (Montague) の2人の兄弟の弟エドリック (Edric) である。彼は軍人でリーダーシップに優れた兄エドモンド (Edmond) と異なり、物事を深く考える性格で、社会との関わりを嫌い人間の死後の魂の行方に関心を持つ男として描かれている。人間の死後がどうなるのかを思い悩むエドリックは、カトリック神父モリスのアドバイスを受けて家庭教師エントヴェルフエン博士 (Dr. Entwerfen) とエジプトへ行き、最近発見されたケオプスのミイラを蘇らせることを通してこの疑問を解決しようとする。(2)

モリス神父に促されたエドリックとエントヴェルフエン博士は、すぐさま「気球」(balloon) に乗ってエジプトへと旅だった。さしたる困難に遭遇することなくエジプトに到着した2人は、ガイドに先導されてピラミッドに入り、ファラオ・ケオプスの棺を見出して、ミイラとなって静かに眠っていたファラオを蘇らせた。ケオプスは別名クフ王、エジプト古王国時代の第4王朝 (2613BC 頃-2494BC 頃) のクフ王 (Khufu; 2589BC-2566BC) のことである。父スネフェル (Sneferu) の後を継いだ第4王朝2番目のこのファラオは、ヘロドトスが『歴史』の中でギリシア語読みのケオプスと書いて以来、西欧ではこの名が使用されている。ギザの大ピラミッドを造ったケオプスはヘロドトスによると、ピラミッド建立の資金を得るため、強制労働を強いて国民を悲惨な状態に陥れただけでなく、自分の娘を娼家に売り飛ばした悪王ということになっている。『ミイラ!』にも、ケオプスが何度も

自分の悪行と罪に言及する場面が出てくるが、ジェインはこれをヘロドトスの記述とは異なる理由—妹との近親相姦と父親殺し—に変えている。ケオプスのこの罪は、棺の上に描かれている彫り物の意味をエドリックに教える小説の最後の場面で明かされることになる。

ピラミッドの中に入りケオプスを蘇らせる場面に描かれている鋭い眼光と不気味な笑い声は、これ以降彼が現れる時には必ず出てくる特徴となっており、それらは布で覆われた姿と共に、人々を恐怖に陥れる役目を果たしている。覆い布は普通の服に代わることはあっても、鋭い目と笑い声は最後まで変わることはなかった。(3)

自分たちが蘇らせたミイラを前にして、恐怖の余り気絶してしまったエドリックとエントヴェルフエンは、目をさましてみると、気球が跡形もなく消えていることを発見する。棺から出たケオプスは気球を見つけ、それを自分で操縦してイギリスへと飛び立ったのであった。イギリスは女王が亡くなり、その跡継ぎを心優しいエルヴィラ (Elvira) にするか従妹で気性の激しいロザベラ (Rosabella) にするか混乱の最中にあった。姿を現すたびに人々を驚かし、恐怖に陥れるだけの存在にすぎなかったケオプスは、最初はこの内紛の理由を理解できなかった。しかし彼は徐々に人間同士の醜い権力闘争の意味を知ようになり、エルヴィラを王位につけるために策略をめぐらして成功する。そして社会を安定させることに貢献した後、故国に戻り再び眠りについたのである。

エドリックは、悪が減びて正統な女王が王位についた後に再びエジプトを訪れ、ケオプスから棺の上の彫り物の意味を明かされる。ケオプスは、父を殺し妹と結婚した自分の罪を告白し、それを償うために悪をこらしめたのだと語った後、人間に許されている範囲を超えて隠された秘密を知ろうと求めることは不幸を招くこと、さらに、幸福に至る道は他人に有用な人間になることだと論じ、棺に戻っていった。(4)

この小説の最後でケオプスがエドリックを含めた人間一般に語る言葉は、『フランケンシュタイン』のテーマと通底するものを持っている。ケオプスは『フランケンシュタイン』のクリーチャーと同じく、人間の善悪

を見分ける洞察力を持つ理性的存在として描かれているからである。しかし彼は生みの親への復讐を果たした後に、いずこへともなく消えていくクリチャーとは異なり、自分の役割を成し遂げると、エドリックに人間に必要な幸福の意味を教えて棺の中に戻る。この結末には、ヴィクトリア時代を生きるジェイン・ラウドンの保守的な倫理観が確かに示されていると言える。

『ミイラ!』における移動手段はバルブで操作する「気球」だけではない。家は「動く」(moving house) ので、都会から田舎へ行く時は家具や衣装をそのまま持っていくことができる。「可燃性ガスで膨張させる空飛ぶ馬」(aerial horses...inflated with inflammable gas) や、空飛ぶ橇 (aerial sledges) も利用されている。家には「汚れた空気を排出し新鮮な外気を取り込むチューブ」(the tubes for withdrawing the decomposed air, and admitting fresh) もついていて、部屋をきれいに保つことができる。手紙は弾丸に入れて大砲で発射され、この仕掛けは「蒸気大砲による手紙弾丸」(letter-balls by steam-cannon) と呼ばれている。人間と荷物を運んで川を渡し、対岸に着くと折りたたまれる「可動橋」(movable bridge) もある。「自在に曲がる鋼鉄」(steel perfectly flexible) という素材は武器製作に役立つだけでなく、様々な用途を持ち、蒸気を動力とする「蒸気芝刈り機」(steam-mowing apparatus) や「蒸気耕耘機」(steam digging-machine) は畑仕事をドラスティックに軽減させてくれる。

「気球」を除けば、プロットの展開にさほど必要とは思われないこれらの移動手段や道具類の描写からは、結婚後、ガーデニング・ブックという実用的な書物を書くことになるジェインの想像力のありようの一端が垣間見えるということが出来るだろう。進んだ科学技術の産物を享受する22世紀に古代のミイラを蘇らせ、人間はどうあるべきかを説くSF小説を書いたジェイン・ラウドンには、人間は創意・工夫と倫理性を併せ持つことが必要であり、それは、過去・現在・未来においても変わらないという強い思いがあったということである。⁸

5. 結婚生活—ガーデニングへの開眼

匿名で出版された『ミイラ!』は評判となり、描かれている未来の社会で使用される蒸気芝刈り機や蒸気耕耘機に興味を示したのがジョン・クロウディアス・ラウドンである。⁹『ミイラ!』の書評を『リテラリー・ガゼット』(*Literary Gazette*)誌で読んで興味を惹かれたジョンは、自分の雑誌『ガーデナーズ・マガジン』(*The Gardener's Magazine*)に「改良へのヒント」(“Hints for Improvements”, 1828)という記事を載せた。小説に出てくる斬新な機械類の描写に関心を持ち、農業の技術改良などについて作者と話し合いたいと思っていたジョンは、知人の紹介でジェインと出会う。1830年2月のことである。『ミイラ!』の作者が華奢な23才の女性だということを知ったジョンは驚いたが、2人は24才の年齢差にも関わらずたちまち惹かれあうものを感じ、その半年余り後の9月に結婚した。

経済的なゆとりのなかったラウドン家は、庭作業をする職人を1人しか雇えなかったので、ジェインは結婚当初から外に出て働かなければならなかった。努力家のジェインは、庭での仕事をこなしていくうちに、今まで無縁であったガーデニングの実践的なスキルを習得していったが、それと同時にガーデニングの基本や植物学の理論を知りたいと思うようになっていく。ジョンの教えてくれることは、初心者のジェインには必ずしも理解できることばかりではなかったからである。この欲求を満たすため、彼女は暇ができると、夫の書棚にあった本に読みふけた。その結果ジェインは、ほとんどのガーデニング・ブックは、彼女のような初心者には向いていないことを知るに至ったのである。この事実を知ってからジェインがガーデニング・ブックを書くまでには10年近く待たなければならなかったが、彼女は結婚生活の中で、自分の役割を忠実に果たすことを通して天職に目覚めていったと言えるだろう。結婚前に書いた『ミイラ!』のようなジャンルの小説への熱意は消えていった。

ところでジョン・ラウドンには、リウマチという持病があり、1825年には右手を失うという不幸に見舞われている。彼はこの不運を克己心で克服

し、残された左手の指を使って絵も描けるように努力し著作も続けたが、不自由な身体ではガーデン・ツアーにも思うように出かけられなかった。そのためジェインは忍耐強く、旅行の随行者、口述筆記者、看護師となって、夫の死に至るまで傍に付き添うことになった。

ジョンはこのように妻に助けられたが、ジェインも夫の姿から大事なことを学んだ。結婚後間もなくジェインの故郷バーミンガム、湖水地方、スコットランドへ出かけた時のことである。新婚のジェインは楽しい旅を期待していたが、夫の関心はそこにはなく、多くの場所を精力的に見て回り、道々に生えている雑草の種類を教えてくれるだけだった。ノートを取るのに忙しかった夫の姿からジェインは、土地特有の「植物相」(flora)と「動物相」(fauna)を知ることが重要だということを学んだのである。それは、「植物を育て庭を造る立派なガーデナーになるためには、植物学を知ることが必須である」ということに他ならなかった。

植物学を知りたいという気持ちを忘れなかったジェインは、結婚2年目の1832年にロンドンの王立園芸協会 (the Royal Horticultural Society) で行われたジョン・リンドリー (John Lindley; 1799-1865) の植物学講義に参加し、植物学を基礎から学ぶことになる。リンドリーは協会に勤めるかたわら、創立間もないロンドン大学の植物学教授に1829年に就任したばかりの気鋭の学者であった。彼はそれまで植物分類の主流となっていたカール・フォン・リンネ (Carl von Linné; 1707-1778) の、雄蕊と雌蕊の数に従った人為的な植物分類法ではなく、フランスやスイスの学者の唱導する、植物の形態による自然分類法を用いた新しい植物学をイギリスに導入しようとしていた。¹⁰ ジェインは講義を毎回受講して熱心にメモをとり、自分に欠けていた知識を蓄積していったのである。この講義で知れた最新の植物学体系は、10年後に出版することになる女性のための植物学の本の土台になったと思われる。

講義に通ったこの時期はジョンが大部な『19世紀イギリス田園建築百科事典』(*An Encyclopaedia of Cottage, Farm, and Villa Architecture and Furniture*, 1833) の執筆に取り掛かっていた時と重なっていた。しかしジェインは自

分の使命を忘れることなく、昼の講義の後、夜は夫の著作の口述筆記をするというハードな生活を続けた。(5) 伝記作家ハウは、ジョンを「うなりをあげる人間発電機」(whirling human dynamo) と述べているが、この言葉は、この時期だけでなく生涯を通して、妻ジェインにもあてはまる言葉だと言えるだろう。

6. 小説からノンフィクションへ—女性のためのガーデニング・ブック

1832年には娘のアグネス (Agnes) が誕生し、ラウドン家は賑やかになったが、出産後も仕事量は減じるどころかむしろ増えていくばかりであった。そのような中で、ジェインはいよいよ本格的なガーデニング・ブックを世に問うことになる。初心者や女性にもわかりやすいガーデニング・ブックを書きたいというジェインの思いが、1839年の『ガーデナーズ・マガジン』誌上の記事として結実したのである。雑誌に連載されたこの記事は、その後『女性のフラワー・ガーデン: 鑑賞用一年草』(*The Ladies' Flower Garden of Ornamental Annuals*) として1冊の本にまとめられ、1840年に出版された。『女性のフラワー・ガーデン』は、1848年までに『球根植物』(*Bulbous Plants*, 1841)、『宿根草』(*Perennials*, 1843)、『温室栽培植物』(*Greenhouse Plants*, 1848) と3冊が続く全4巻のシリーズの最初のものであった。イギリスで入手できる花をその形態ごとにまとめて記述したこの書は、一種の植物事典と言えるものである。前書きと序では、リンドリーや夫の雑誌に言及しながら、出版目的と全体の構成が理路整然と説明され、巻末には、索引と参考文献も完備しているこの書は、ジェインのこれ以降のガーデニング・ブックに共通する体裁を示している。序のはじめで、終生変わらぬ思い—美しい花々は心を豊かにさせ、それらを授けてくれた神への感謝の気持ちを引き起こさせる—を述べた後、一年草は安い値段で購入できて短い期間で花が咲くため、手入れも簡単で手を汚したり労力をかけずに栽培可能であり、女性の余暇には最適だという言葉が続く。そして本文にはこの序を証明するための色鮮やかな美しいリトグラフの画が多数添えられている。(6)

『女性のフラワー・ガーデン』と同じ1840年には、『女性のためのガーデニング指南』(*Instructions in Gardening for Ladies*)が出版された。これはガーデニングの実際について書かれたマニュアル本と言えるものである。結婚してガーデニングを全くの初心者から始めた時以来、どうしてもほしいと切望していたガーデニングの基本と実際に教える書であった。序には、長い間の願望が成就した喜びが、夫への感謝の言葉と共に述べられている。(7)

ここでは全体を12章に分け、土起こし、種まき、肥料、水やり、寒さ対策、病虫害対策、株分け、剪定などの基本的で実用的な記事から、キッチン・ガーデンやフラワー・ガーデンの設計、1月から12月の庭で行う作業まで、ガーデニング初心者である女性にとって必須で有益な事柄が詳しく説明されている。前扉には、母と娘が体を締め付けない衣服で庭に佇むイラスト、本文中には自分自身の考案した非力な女性のための革製の手袋のイラストも載せられていて、女性たちが野外労働するためのきめ細やかな心遣いが読み取れる。当時の女性たちがこのような本をいかに望んでいたのかは、この書が出版当日に1,350部売れ、その後3版を重ねるほどの人気を博した事実から理解される。

このように、自分の書きたい、書かなければならないという欲求に従って1840年に女性向けの2冊のガーデニング・ブックを出版したジェインは、1841年には花壇の花をアルファベット順に並べた『女性のためのフラワー・ガーデンの友』(*The Ladies' Companion to the Flower-Garden*)と『女性のためのフラワー・ガーデン』シリーズの第2巻『球根植物』を出版した。そして休む間もなく、『女性のための植物学』(*Botany for Ladies*)の執筆に取り掛かる。夫がいつも言い聞かせていた植物学の必要性という言葉を忘れることのなかったジェインの思いは、1842年に大部な本となって結実したのである。

1839年から1841年にかけて出版された本には、植物学的情報も載せられてはいたが、それらは本格的な植物学に関するものではなかった。そのためジェインは『女性のための植物学』の前書きで、植物学と自分の関わ

りを個人的経験に即して具体的に説明し、リンネの難しいラテン語の専門用語を理解できなかった自分が植物学を学ぼうとした理由や、女性が植物学を通してどのような力を得ることができるのかを明快な筆致で述べている。(8)この言葉には、同性に対するジェインの励ましと共に、すべての人間がよりよく生きるために努力することによって進歩や発展があるという、19世紀イギリス社会の思想が反映されてもいると言えるだろう。

『女性のための植物学』には『ドゥ・カンドールの分類に従った植物の自然分類への平易な序論』(*A Popular Introduction to the Natural System of Plants, According to the Classification of De Candolle*)という長い副題が付けられている。この副題によりジェインは、自分の書がリンネの分類法ではなく、スイスの植物学者ドゥ・カンドールの分類法に基づいた最新の成果であることを宣言しているのである。全体は2部に分けられ、第1部は12章、第2部は4章から成り立っている。第1部では、ランンキュラス目 (The Order Ranunculaceæ) からコニファー目 (The Order Coniferæ) までの植物が、形態によって分類されてそれぞれの働きが記述され、第2部ではこれを受けて、植物群がさらに大きな枠組みの下で再分類されて、それらが植物界全体の中でどのような位置を占めているのかが説明されている。女性にも理解できる植物学の本を書くというジェインの決意は、難解なラテン語を排して専門用語も極力英語で記述しようとしているところからも明らかに見て取れる。

ジョンはジェインがついに大部な本を書き上げたことを誇りに思い、1842年末の『ガーデナーズ・マガジン』誌上で、「初心者のために書かれた最も優れた植物学の入門書」と褒めたたえた。そこには、「植物学の知識を持つことがよきガーデナーには必須である」という自分の言葉を実行に移したジェインの努力の成果を喜び、これが多くの女性たちに読まれることを希望するという思いが込められていた。

7. 夫の死を超えて—ジェインの伝えたかったこと

ジェインが『女性のための植物学』を出版して、ガーデニング作家として一人前になったことをジョンが確信した翌年の1843年、数年来優れなかった彼の体調は一段と悪化していった。肺の感染による高熱で背中が痛み、激しく咳き込む日が続く。しかも彼はやるべき仕事と借金を残していた。ジェインもまた夫の看病に忙殺されながら、出版予定の2冊の本を抱え、その上、子供向けのワイト島の自然誌についての本も請け負っていた。このような状態の中で、一家は夏にワイト島への旅行に出かける。それまでも体調を崩して死の淵まで行ったジョンが、超人的に回復したことがあったため、本人もジェインもそれほどの心配をしていなかったのである。しかし現実とは予想を覆し、旅から戻ったジョンの衰弱は急激に進む。もはや誰の目にも彼の死期が近づいていることが明白になった。回復の見込みがなく、残された時間の少ないことを自覚したジョンは、しかし、強靱な精神力によってやりかけの仕事を完成させようと努力する。毎日毎晩、2人は書斎にこもり、ジョンの口述をジェインが書きつける作業に没頭した。それをやりつつ、ジェインは予定通り『ワイト島旅行中にみた自然』(*Glimpses of Nature During a Visit to the Isle of Wight*, 1843)を書き上げた。

ジェインが約束通りの仕事を終えたことを見届けたジョンは、1843年12月、妻に抱かれるように亡くなった。刻々と死に向かってゆくジョンの様子と、それを見守るしかない自分の姿をジェインは短い夫の伝記に克明に書き記している。それはどのような困難をも2人で乗り越え、運命と最後まで戦った夫婦の見事な記録と言える。最後に描写されている臨終の様子と、ジョンが多くの著作を残しただけでなく、よき家庭人であったことへの感謝の言葉は、簡潔であるが故に、一層胸をうつ記述となっている。(9) ジョン・ラウドンとジェイン・ラウドンは、彼らが残した膨大な著作によっても、また、互いに助け合い高め合う同志であったという意味においても、忘れることのできない稀有なカップルであった。

夫の死後もジェインは、娘のアグネスと彼の2人の妹との生活を支える

ために、著作を続けた。半年という短期間ながら創刊された『女性の友：家庭の内と外』(*The Ladies' Companion: At Home and Abroad*)という雑誌の編集長にもなり忙しく働いた。そして心ならずも辞めざるを得なかったこの雑誌での最後の記事に、女性は男性にすぎるのではなく、自らの手で幸せをつかみ取るよう努力しなければならないという次のような言葉を記している。

Real and vital happiness depends only on *ourselves*. If once the mind can grasp this truth, and with firmness and courage resolve to draw happiness from the sources whence alone it springs, no storms from without will permanently shake us, no fears depress, no trials overcome us. (*Lady with Green Fingers*, 122)

自宅の庭を、ラウドンの未亡人として恥ずかしくないように美しく保ち、1人娘のアグネスを一人前に育て上げ、多くの友人を招いて社交にも精を出したジェイン・ラウドンは、夫の死後14年たった1857年7月、結婚以来住んだ、夫の設計した自宅で、アグネスに看取られながら静かに息を引き取った。享年50才であった。

8. おわりに

ジェイン・ラウドンは、ジョン・ラウドンの伴侶として、また小説家・ガーデニング作家として、たゆまぬ努力を続けた女性であった。想像力を駆使して未来社会を舞台にした小説を書き、ガーデニング・ブックの前書き、序、編集長を務めた雑誌の記事の中で、自分の仕事の意味を経験に即して述べて、同時代を生きる女性たちに力を与えた。自分の書物が、科学的知識の大衆化に繋がるだけでなく、それを介して女性たちが神の存在を認識し、男性とは異なる女性の領域を最大限にまで広げて実り豊かな人生を過ごすことができるようにと願った。この意味において、ジェインは、まさにヴィ

クトリア時代の性差のイデオロギーを受け入れていたと言える。

しかしこのように時代のイデオロギーを当然と受け入れていたことは、ジェインの仕事の過小評価に繋がるものではない。男性と女性の役割に違いがある社会で、夫に尽くし、子供を育て、また自分に課せられている役割を精一杯果たし努力することが、声高に社会の不平等を糾弾することより大切だと考えられていた時代があったのだ。200年前のイギリス女性ジェイン・ラウドンがその生き方と著作を通して21世紀の日本に生きる私たちに励ましを与えてくれるとすれば、文学・文化研究の持つ意味は大きいと言えるだろう。¹¹

本稿は、2015年12月5日（土）に行った「日本シェリー研究センター第24回大会」の特別講演の原稿に加筆し修正したものである。

注

1. 本稿はジェイン・ラウドンの紹介を目的としたものであるため、読みやすさを考慮して、引用はジェインの作品のみに留め、参考文献からの引用は省いた。注には小文字の算用数字を、引用には大文字の算用数字を記して、最後に一括してまとめたが、『女性の友：家庭の内と外』(*The Ladies' Companion: At Home and Abroad*)に載せた読者への言葉は本文中に示した。また全3巻に及ぶ『ミイラ!』のテキストは、第1巻 Bibliolife、第2巻 Kessinger Publishing、第3巻 Ann Arbor Paperbacksと、それぞれ異なる版を使用した。
2. ジェイン・ラウドンの伝記的事実は、主に次の3つを参考にした。Bea Howe, *Lady with Green Fingers: The Life of Jane Loudon* (London: Country Life Limited, 1961); Jane Loudon, "An Account of the Life and Writings of John Claudius Loudon" in *John Claudius Loudon and the Early Nineteenth Century in Great Britain*, ed. Elisabeth B. Macdougall, (Washington, District of Columbia: Dumbarton Oaks, 1980); Sarah Dewis, *The Loudons and the Gardening Press: A Victorian Cultural Industry*, (Burlington: Ashgate Publishing Company, 2014). マクドゥガル編の論文集の巻頭に置かれたジェインによるジョンの伝記は、ジェインも含む夫婦の記録

として読むことができる。ラウドンが19世紀の園芸、造園、建築の領域をいかに大衆にわかりやすいものにしたのかを論じたデーヴィスの書の第6章には、ジェインの伝記と功績も詳しく述べられている。Sarah Dewis, “Jane Webb Loudon, Editor and Author of Garden Publications” (Chapter 6, 195-235). これら以外の多くの女性のガーデニングに関する書にもジェインの伝記的事実は簡潔に紹介されている。ジョンの姉もジェインという名前だったので、ジェインの名前をウェブ・ラウドン (Webb Loudon) としている研究者もいるが、本稿ではジェイン・ラウドンに統一した。

3. イギリスにおける「エジプト熱」や「ミイラ熱」と、ヨーロッパで知られていたギリシア以来のミイラの情報については、次を参考にした。Jasmine Day, *The Mummymania in the English-Speaking World* (New York: Routledge, 2006); Lynn Parramore, *Reading the Sphinx: Ancient Egypt in Nineteenth-Century Literary Culture* (New York: Palgrave Macmillan, 2006); Judith Pascoe, “Belzoni in Ruins,” in Judith Pascoe, *The Hummingbird Cabinet; A Rare and Curious History of Romantic Collectors* (Ithaca and London: Cornell UP, 2006); フランソワーズ・デュナン/ロジェ・リシタンペール『ミイラの謎』吉村作治監修（東京：創元社、1994）；ヘロドトス『歴史』松平千秋訳（東京：岩波書店、2008）。
4. ベルツォーニの伝記的事実は、次の2冊を参考にした。Stanley Mayes, *The Great Belzoni: The Circus Strongman Who Discovered Egypt's Treasures* (London: I. B. Tauris & Co. Ltd., 2010); Ivor Noël Hume, *Belzoni: The Giant Archaeologists Love to Hate* (Charlottesville and London: U of Virginia Press, 2011). ベルツォーニという特異な探検家の伝記であるこれら2冊は、18世紀後半から19世紀前半にかけてのヨーロッパ（特にイギリスとフランス）が、エジプトとどのように関わったのかを教えてくれるだけでなく、1870年に87才で亡くなった妻サラ (Sarah) の記述も多く、「女性と旅」というテーマの研究にも資するところがあると思われる。
5. 19世紀半ばまで流行したミイラの包帯を見物人の前で解いてゆく行為は、初めは見世物として行われていたが、次第にこの行為に続けて解剖をするという医学的・科学的作業になっていった。このミイラ解包の第一人者にあげられているのが、トマス・ジョセフ・ペティグルー (Thomas Joseph Pettigrew; 1791-1865) である。
6. ベルツォーニは日記をつけていたにも関わらず、『発見物語』には場所を始めとする様々な記述の間違い、英語の文章の不正確さも多い。しかし彼の名声は轟いていたので、この書はイタリア語とフランス語にも翻訳されている。ルーシー・アトキンズの『冒険の果実』は、ベルツォーニの業績を彼の勇気の結果として子供たちに教え、同時に、エジプトという未知なる国への好奇

心も刺激する読み物で、18世紀以降目立ってくる母子の会話を中心にした子供向け物語の伝統の中で検討することもできる作品である。

7. 『ミイラ!』には、ペダンチックで難解な言葉を駆使する使用人やロボットの判事なども登場し滑稽な場面も多くあるが、この章ではそれらには言及せず、『フランケンシュタイン』との類似性のみに絞って紹介した。
8. 近年は、『ミイラ!』が『フランケンシュタイン』だけでなく、同じメアリ・シェリーの21世紀末を舞台にした『最後の人間』(*The Last Man*; 1826)の影響も受けているとする研究も増えてきている。本稿ではこれに立ち入ることをしなかったのも、今後は「女性のSF小説」、「女性作家が描く19世紀イギリス政治の風刺」などの方向から研究が進むことを期待する。ただ筆者は、『フランケンシュタイン』と違って、『ミイラ!』と『最後の人間』は、国内統治をめぐる権力闘争が重要な意味を持つことを除けば、それほど顕著な共通性はないのではないかと考えている。「疫病」(plague)による人類滅亡という救いのない陰鬱なテーマを持つ『最後の人間』と、『ミイラ!』の楽天的・保守的な倫理観とは相容れないように思われるからである。ちなみに『最後の人間』に登場する未来の新案品は気球のみである。
9. ジョン・クロードias・ラウドンの守備範囲は非常に広い。彼は狭義のガーデニングだけではなく、農業、墓地、建築（特にコティッジ、ヴィラなどの郊外住宅）、温室などの庭園附属物、家具までも含む多くの著作を残している。1830年にジェインと出会った時には、すでに、『19世紀イギリス庭園百科事典』(*An Encyclopaedia of Gardening*; 1822)、『19世紀イギリス農業百科事典』(*An Encyclopaedia of Agriculture*; 1825)などの著作を刊行していただけでなく、『ガーデナーズ・マガジン』(*The Gardener's Magazine*, 1826年創刊)という雑誌までも作って、編集・執筆をするという活躍ぶりでも、多くの人々に名を知られた存在であった。ジョンの伝記的事実には、次の4冊を使用した。Melanie Louise Simo, *Loudon and the Landscape: From Country Seat to Metropolis 1783-1843* (New Haven and London: Yale UP, 1988); Priscilla Boniface ed., *In Search of English Gardens: The Travels of John Claudius Loudon and His Wife Jane* (Wheatthampsted: Lennard Publishing, 1987); Elisabeth B. Macdougall ed., *John Claudius Loudon and the Early Nineteenth Century in Great Britain*; Sarah Dewis, *The Loudons and the Gardening Press*.
10. ジェインが講義に通った1830年代は、植物学がリンネの学説に依拠したもののから、フランスのベルナル・ドゥ・ジュシュー (Bernard de Jussieu; 1699-1777) やスイスのオーギュスタン・ピラミュ・ドゥ・カンドール (Augustin-Pyramus de Candolle; 1778-1841) などの学者の唱える新しい植物学への移行期にあたっていた。これ以降植物学は、女性にふさわしい嗜みの分野か

ら、男性中心の科学的、専門的分野へと移行してゆくことになる。これに関しては次を参照。Ann B. Shteir, *Cultivating Women, Cultivating Science: Flora's Daughters and Botany in England 1760 to 1860* (Baltimore and London: The Johns Hopkins UP, 1996).

11. 本稿では、ジェイン・ラウドンが読者の求めるもの、経済的に成り立つものを書くことを目指したという仮説を立てて、『ミイラ!』とガーデニング・ブックという、ジャンルの異なるテキストを考察し、ジェインの紹介をした。しかし今後は、彼女の作品をSF小説と実用書とに分けて別箇に考えていくことが、ジェインの全体像を深く理解することにつながるであろう。その際ジェインのガーデニング・ブックを、「女性とガーデニング（書）」、「庭に関わった女性たち」という大きな枠組みの下で読むことも必要だと思われる。

ジェイン・ラウドンの著作からの引用

(1) *Prose and Verse*: 謙遜と次回作への意欲

This small volume is offered with the timidity natural to one who has never before been a candidate for public favour. If it should be approved, it will probably be followed by a larger work, consisting principally of observations made by me, during a residence of more than twelve months on the continent. (i)

(2) *The Mummy!* Vol. I: エドリックとモリス神父の会話

—死後の世界への関心とミイラ

“You convinced me so clearly of the possibility of resuscitating a dead body, that since that moment I have been tormented by an earnest desire to communicate with one who has been an inhabitant of the tomb.”... “I would advise you to step into the adjoining church-yard, where you can try Dr. Entwerfen's galvanic battery of fifty surgeon power, upon a body”... “But where shall I find a body, which has been dead a sufficient time to prevent the possibility of its being only in a trance, and which yet has not begun to decompose?”

“What think you of trying to operate upon a mummy? You know a chamber has been lately discovered in the great pyramid, which is supposed to be the real tomb of Cheops; and where, it is said, the mummies of that great king and the principal personages of his household, have been found in a state of wonderful preservation.” (32-39)

(3) *The Mummy!* Vol. I: ケオプスの棺を開ける—声・鋭い眼光・エドリックの恐怖

They gazed, however, with deep but undefinable interest upon the sculptured

mysteries of the tomb of Cheops. ... He turned to look upon the doctor, but he had already seized the lid of the sarcophagus, and, with a daring hand, removed it from its place, displaying in the fearful light the royal form that lay beneath. ...

Awful, indeed, was the gloom that sat upon that brow, and bitter the sardonic smile that curled those haughty lips. All was perfect as though life still animated the form before them, and it had only reclined there to seek a short repose. The dark eyebrows, the thick raven hair which hung upon the forehead, and the snow-white teeth seen through the half open lips, forbade the idea of death; ...

... he applied the wires of the battery and put the apparatus in motion, whilst a demoniac laugh of derision appeared to ring in his ears, and the surrounding mummies seemed starting from their places and dancing in unearthly merriment. ... Still, he stood immovable, and gazing intently on the mummy, whose eyes had opened with the shock, and were now fixed on those of Edric, shining with supernatural lustre. ... The mummy's eyes still pursued him with their ghastly brightness; ... the Mummy rose slowly, his eyes still fixed upon those of Edric, from his marble tomb. ... Edric saw the Mummy stretch out its withered hand as though to seize him. He saw it rise gradually—he heard the dry, bony fingers rattle as it drew them forth—he felt its tremendous gripe—human nature could bear no more—his senses were rapidly deserting him; he felt, however the fixed steadfast eyes of Cheops still glowing upon his failing orbs, as the lamp gave a sudden flash, and then all was darkness! (218-220)

(4) *The Mummy!* Vol.III: エジプトを再訪したエドリックとケオプスの会話

—人間の幸福の意味とケオプスの最後の言葉

“...My task is now finished; ... be happy, Edric, for happiness is in your power; be wise, for wisdom may be obtained by reflection; and be merciful, for unless we give, how can we expect mercy? Rely not on your own strength—seek not to pry into mysteries to be concealed from man; and enjoy the comforts within your reach—for know, that knowledge, above the sphere of man's capacity, produces only wretchedness; and that to be contented with our station, and to make ourselves useful to our fellow-creatures, is the only true path to happiness.” ... Edric shuddered, and involuntarily rushed forward, but the Mummy no longer lived or breathed. Cold, pale, and inanimate it lay, as though its sleep of three thousand years had never been broken. (296-299)

(5) *An Account of the Life and Writings of John Claudius Loudon*: ハードワーク

In 1832 Mr. Loudon commenced his *Encyclopaedia of Cottage, Farm, and Villa Architecture*, which was his work he ever published on his own account; and in which I was his sole amanuensis, though he had several draughtsmen. The labour that

attended this work was immense; and for several months he and I used to sit up the greater part of every night, never having more than four hours' sleep, and drinking strong coffee to keep ourselves awake. (32)

(6) *The Ladies' Flower Garden of Ornamental Annuals*: 美しくて栽培容易な一年草

We love flowers from our earliest childhood, and even in extreme old age the sight of them recalls something of the glow of youth. The love of flowers is calculated to improve our best feelings, and subdue our bad ones; and we can hardly contemplate the beauty and richness of a flower-garden without feeling our hearts dilate with gratitude to that Almighty Being who has made all these lovely blossoms, and given them to us for our use. Of all kinds of flowers, the ornamental garden annuals are perhaps the most generally interesting; and the easiness of their culture renders it peculiarly suitable for a feminine pursuit. The pruning and training of trees, and the culture of culinary vegetables, require too much strength and manual labour; but a lady, with the assistance of a common labourer to level and prepare the ground, may turn a barren waste into a flower-garden with her own hands. (i)

(7) *Instructions in Gardening for Ladies*: ガーデニングの基本

When I married Mr. Loudon, it is scarcely possible to imagine any person more completely ignorant than I was, of everything relating to plants and gardening; and as may be easily imagined, I found every one about me so well acquainted with the subject, that I was soon heartily ashamed of my ignorance. My husband, of course, was quite as anxious to teach me as I was to learn, and it is the result of his instructions, that I now (after ten years experience of their efficacy) wish to make public for the benefit of others.

I do this, because I think books intended for professional gardeners, are seldom suitable to the wants of amateurs. ... Having been a full-grown pupil myself, I know the wants of others in a similar situation; and having never been satisfied without knowing the reason for everything I was told to do, I am able to impart these reasons to others. (v-vii)

(8) *Botany for Ladies*: 植物学が与えてくれるもの

When I was a child, I never could learn Botany. There was something in the Linnean system (the only one then taught) excessively repugnant to me; I never could remember the different classes and orders, and after several attempts the study was given up as one too difficult for me to master. When I married, however, I soon found the necessity of knowing something of Botany, as well as of Gardening. I always accompanied my husband in his visits to different gardens; and when we saw beautiful flowers, I was continually asking the names, though alas! These names, when I heard

them, conveyed no ideas to my mind, and I was not any wiser than before. Still the natural wish to know something of what we admire, impelled me to repeat my fruitless questions; till at last, vexed at my ignorance, and ashamed of not being able to answer the appeals which gardeners often made to me in doubtful cases, (supposing that Mr. Loudon's wife must know everything about plants,) I determined to learn Botany if possible; and as my old repugnance remained to the Linnean system, I resolved to study the Natural one. ...

I have often heard that knowledge is power, and I am quite sure that it contributes greatly to enjoyment. ... A wild plant in a hedge, a tuft of moss on a wall, and even the Lichens which discolour the stones, all present objects of interest, and of admiration for that Almighty Power whose care has provided the flower to shelter the infant germ, and has laid up a stock of nourishment in the seed to supply the first wants of the tender plant. It has been often said that the study of nature has a tendency to elevate and ameliorate the mind; and there is perhaps no branch of Natural History which more fully illustrates the truth of this remark than Botany. (iii-viii)

(9) *An Account of the Life and Writings of John Claudius Loudon*: ジョンの死

He now appeared very ill, and told me he thought he should never live to finish; but that he would ask his friend Dr. Jamieson, to whom he had previously spoken on the subject, to finish the work for him. Soon after this he became very restless, and walked several times from the drawing room to his bedroom and back again. I feel that I cannot continue these melancholy details: it is sufficient to say, that, though his body became weaker every moment, his mind retained all its vigour to the last, and that he died standing on his feet. Fortunately, I perceived a change taking place in his countenance, and I had just time to clasp my arms round him. To save him from falling, when his head sank upon my shoulder, and he was no more.

I do not attempt to give any description of the talents or character of my late husband as an author; his works are before the world, and by them he will be judged; but I trust I may be excused for adding, that in his private capacity he was equally estimable as a husband and a father, and as a master and a friend. He was also a most dutiful son and most affectionate brother. ... (39-40)

参考文献

- Alkon, Paul K., *Origins of Futuristic Fiction*. Athens and London: The U of Georgia Press, 2010.
- Atkins, Lucy Sarah Wilson. *Fruits of Enterprize Exhibited in the Adventures of Belzoni in Egypt and Nubia: With an Account of his Discoveries in the Pyramids, among The Ruins of Cities, and in the Ancient Tombs*. New York: Scholar's Choice, 1843.
- Belzoni, Giovanni Battista. *Narrative of the Operations and Recent Discoveries within The Pyramids, Temples, Tombs, and Excavations, in Egypt and Nubia*. London: John Murray, 1822.
- Boniface, Priscilla ed. *In Search of English Gardens: The Travels of John Claudius Loudon and His Wife Jane*. Wheathampstead: Lennard Publishing, 1987.
- Day, Jasmine. *The Mummy's Curse: Mummymania in the English-Speaking World*. New York: Routledge, 2006.
- Dewis, Sarah. *The Loudons and the Gardening Press: A Victorian Cultural Industry*. Farnham: Ashgate, 2014.
- Howe, Bea. *Lady with Green Fingers: The Life of Jane Loudon*. London: Country Life Limited, 1961.
- Horwood, Catherine. *Gardening Women: Their Stories from 1600 to the Present*. London: Virago, 2010.
- Hume, Ivor Noël. *Belzoni: The Giant Archaeologists Love to Hate*, Charlottesville and London: U of Virginia Press, 2011.
- Loudon, Jane. *Prose and Verse*. Nabu Public Domain Reprints, 1824.
- . *The Mummy! A Tale of the Twenty-Second Century, Vol. I*. Charleston: Bibliolife, 1828.
- . *The Mummy! A Tale of the Twenty-Second Century, Vol II*. Kessinger Publishing, 1828.
- . *The Mummy! A Tale of the Twenty-Second Century*. Ed. Alan Rauch. Ann Arbor: The U of Michigan Press, 1994.
- . *The Ladies' Flower-Garden of Ornamental Annuals*. Norderstedt: Read Books Ltd., 2013.
- . *Instructions in Gardening for Ladies*. Cambridge: Cambridge UP, 2013.
- . *The Ladies' Companion to the Flower Garden Being an Alphabetical Arrangement of All the Ornamental Plants Usually Grown in Gardens and Shrubberies*. Oxford: Oxford UP, 2012.
- . *Botany for Ladies or, A Popular Introduction to the Natural System of Plants, According to the Classification of De Candolle*. Cambridge: Cambridge UP, 2015.
- . *Ladies' Flower Garden* (CD-ROM & Book). New York: Dover Publications, Inc. 2007.

- Luckhurst, Roger. *The Mummy's Curse: The True History of a Dark Fantasy*. Oxford: Oxford UP, 2012.
- Macdougall, Elisabeth B., ed. *John Claudius Loudon and the Early Nineteenth Century in Great Britain*. Washington: Dumbarton Oaks, 1980.
- Mayes, Stanley. *The Great Belzoni: The Circus Strongman Who Discovered Egypt's Treasures*. London: I. B. Tauris & Co. Ltd., 2010.
- Parramore, Lynn. *Reading the Sphinx: Ancient Egypt in Nineteenth-Century Literary Culture*. New York: Palgrave Macmillan, 2008.
- Pascoe, Judith. *The Hummingbird Cabinet: A Rare and Curious History of Romantic Collections*. Ithaca and London: Cornell UP, 2006.
- Shelley, Mary. *Frankenstein*. Ed. J. Paul Hunter. New York and London: W. W. Norton & Company, Inc., 1996.
- . *The Last Man*. Ed. Morton D. Paley. Oxford and New York, Oxford UP, 1994.
- Shteir, Ann B. *Cultivating Women, Cultivating Science: Flora's Daughters and Botany in England 1760 to 1860*. Baltimore and London: The John Hopkins UP, 1996.
- Simo, Melanie Louise. *Loudon and the Landscape: From Country Seat to Metropolis 1783-1843*. New Haven and London: Yale UP, 1988.
- Way, Twigs. *Virgins Weeders and Queens: A History of Women in the Garden*. Phoenix Mill: Sutton Publishing, 2006.
- Wilkinson, Anne. *The Victorian Gardener: The Growth of Gardening & the Floral World*. Phoenix Mill: Sutton Publishing, 2006.
- フランソワーズ・デュナン/ロジェ・リシタンベール『ミイラの謎』吉村作治監修、東京：創元社、1994。
- ヘロドトス『歴史』(上) 松平千秋訳、東京：岩波書店、2009。